

教師教育としての「教職実践演習」 －生徒と共に明日を考える教育実践－

逸見 敏郎

1. はじめに－「教職実践演習」のねらい

2008 年 3 月の「教育職員免許法施行規則の一部を改正する省令」に基づき、2010 年度入学生から「教職実践演習」が、教職課程履修最終学年の後期に必修化された。従来は、教職課程履修最終学年で履修する「教育実習」が教職課程の総仕上げ、とされていたが、2010 年度入学生からは、「教職実践演習」が「教育実習」も含み、教職課程履修の最後の仕上げとなったのである。

法令によれば、以下の点が「教職実践演習」実施に際して、必要とされている。

- 1) 「教職に関する科目」担当者と「教科に関する科目」担当者が連携して展開すること。
- 2) 「教育実習」を修了したか、当該年度に履修中の学生を対象に教職課程履修最終年次後期に開講すること。
- 3) 1 クラスの規模は 20 名程度とする。
- 4) 授業目標は以下の 4 点であり、授業時間を含むこと。
 - ①教師の使命感や責任感・教育的愛情等に関する事項
 - ②教師の社会性や対人関係能力に関する事項
 - ③教師の幼児児童生徒理解や学級経営等に関する事項
 - ④教師の教科や保育内容等の指導力に関する事項
- 5) 授業目標をもとに、地域教育委員会や現職教員の講義、ディスカッションやロールプレイ等も実施すること。

- 6) 教職課程履修時より作成する「履修カルテ」を活用すること。

上記『「教職に関する科目」担当者と『教科に関する科目』担当者が連携』については、本学では、教育実習の研究授業等の訪問指導については、教職課程設置の学科教員がおこなっている経緯を踏まえ、教育実習に関わる部分において、学科教員と共同で科目運営をおこなっている。また「5) 地域教育委員会や現職教員の講義」に関して、設置キャンパスにある関係校管理職及び教育委員会による講義を展開している。

本稿では、上記以外の「教職実践演習」クラスで展開した授業内容について報告し、この科目の意義を確認したい。

2. 「教職実践演習」を展開するにあたって

本学は、その形態を中規模都市型総合大学として位置づけることができる。それもあってか、学生の卒業後の進路希望は、民間企業就職者が大多数を占め、その中に教員志望学生を含め、その他の進路を希望する学生が混在している状況が伺える。中学校高等学校の教員を目指す学生については、教育実習参加学生数はここ数年、280 ～ 300 名前後を推移しており、そのなかでの教員志望学生の比率は全学的傾向とほぼ同じである。

教職課程を履修することは、教員免許状の取得

を目ざすことである。しかし、それは学びの最終的な成果であり、その学びの過程においては教育の理路はもちろんのこと、人間の成長発達過程、教授方法、情報機器の操作方法、そして日本国憲法など、市民として自分自身を育て、育む視点や態度、方法および他者を育て、育む関わりかたを学習するのである。教職課程履修の最終学年に、学生が「教育実習」を履修すると、2ないし3週間という限られた期間ではあるが、30名前後の生徒たちを前にして授業をおこない、また学級運営の一端を担うことを体験することになる。たとえば、授業実習は、先人の築いてきた学問を自らの中に取り込み、その成果を目前の対象の発達段階に応じた工夫を施しながら伝え、理解させる行為と理解できる。これは、教える側の当事者となる体験に他ならない。この体験を深化させ、普遍化させていくことは、将来、何らかの形で、「教え」「育む」営為に自分が当事者になり、関わる時の立ち位置や方法について予測的に考えることでもある。

また、近年の中学校や高等学校では、キャリア教育の一環で、職場体験やインターンシップなどが実施され、生徒たちが自分自身の将来を見据え、考えるような教育活動も取り入れている。それは、やや乱暴な言い方になるが、学校教育全体を俯瞰すると、授業や特別活動等は、先人による過去の歴史的文化的事象を学び、理解し、それをもとに生徒自らが自分自身の人生や時代を拓く主体となることを目的とする営みが中心となるといえよう。つまり、現在の立ち位置で過去を学習することから、未来を切り拓くという図式が展開されているのである。

上記の点を踏まえて、本学教職課程最終学年の学生を対象とした「教職実践演習」では、筆者は、教員が中学生や高校生が自分の未来を見つめ、それを実現できるための方途を見つけることを目指す授業を展開した。学校を終え就労することを目前とした大学生が、教職課程履修における学びと大学生までの生活総体から得た知見や経験を中学校または高等学校の特別活動の一環として生徒に伝えることを目的とした。

3. 方法

2014年度に担当したクラスは、新座キャンパスにある福祉学科・コミュニティ政策学科・スポーツウエルネス学科・観光学科・交流文化学科・心理学科の学生からなる28名のクラスであった。学科バランスとしては、スポーツウエルネス学科の学生が7割を占め、他の学科はほぼ均等であった。学生の性別比は、6：4で女子学生がやや多く見られた。

受講学生への教示は、「自分が中学校ないし高等学校のクラス担任になったと想定する。そのうえで、グループごとに4月初回のホームルーム、つまり学級開きをおこなう際に担任としてのメッセージを『学級新聞』ないし、『教科通信』として作成する」というものであった。また、具体的な手続きとしては、次の点を示した。

- ①対象となる学校種及び学年や扱うテーマは、グループ単位で検討し、決定する。内容はテーマに基づき、メンバー各人の意見を取りまとめたものとする。
- ②グループとして伝えたい内容が対象となる生

徒に伝わるような工夫をした表現方法を考える。

- ③各自が自分の体験したことを基礎として、それを裏付ける理論や調査データなどと共に表現する。

- ④「学級新聞」または「教科通信」のサイズは、最大で A 3 判用紙両面とする。

この手続きの中には、グループワーク、体験の相対化、制限内での効果的プレゼンテーションなど、「教職実践演習」展開の法令上の必要事項を含め、学生が最後の学習期間で習得すべき内容を含むことを意図した。

4. 結果と考察

28 名は、5 グループに分かれ、各グループは 5 ないし 6 名から構成された。グループでの話し合いの結果、全てのグループが学級新聞を作成することとなった。またその対象についても、グループ単位で決め、中学生を対象とするものが 3 グループ、高校生を対象とするものが 2 グループであった。これは、学生自身が参加した教育実習校とほぼ同一であった。すなわち、教育実習で教壇に立ち、授業実習や学級運営実習をした時の体験をもとに、学級新聞を通して伝えたいメッセージの対象者を選択していることがうかがえた。また、対象とする学年については、中学生対象の場合は、1 年か 3 年、高校生対象の場合は、3 年であった。

学級新聞のテーマは、中学生対象、高校生対象を問わず、「夢を叶える」「部活動から得ること」「勉強する意味」「職業を選ぶ」に収斂した。これは、保健体育免許取得希望者が多いクラス

であり、大学生生活を通して運動部の活動をしてきた学生が多いこと、受講学生全員が、就職活動を体験し、それを通して自分自身のキャリア形成に直面した体験を共通に持つことに起因すると推測できる。

特徴的な内容について、詳述したい。「夢を叶える」のテーマを中学校 3 年生の学級新聞で伝えることとしたグループの学生 A は、陸上競技のトップアスリートだった為末大氏の著書や講演から、学校の教師や運動の指導者が口にする「夢は追い続ければ必ず叶う」という言説を素材にした。A 自身が高校時代から陸上競技に打ち込んでおり、自分自身の体験と「努力を重ねても、能力には優劣があり、それを直視することが不可欠。しかし、そのことと人間の優劣には関係ない」という為末の主張を取り入れながら、高校受験に直面する中学 3 年生のスタートへのメッセージとしていた。これは、A 自身がアスリートとして練習を重ね、競技会に参加し、結果を受け止めることを繰り返してきた体験を語るだけでなく、その体験を思考し、語る時、為末の言葉と出会い、その言葉を援用して中学生に物語る行為をおこなったと言えよう。

また学生 B は、中学校 1 年生を対象とした学級新聞で、「アンパンマン」や「クレヨンしんちゃん」といったひろく人口に膾炙されているアニメ作品を素材にして、セリフの解釈や分析をおこなった。例えば「クレヨンしんちゃん」でしんのすけが語った「弱い者ほど、相手を許すことができない。許すということは、強きの証だ」をもとにして、このフレーズがガンジーの言葉であることや、友達との関係において、許すためには、相手のことを想像し、理解する思いや

りが必要であることを説明している。Bが想定しているクラスの生徒たちのほとんどは、小学生の頃に「クレヨンしんちゃん」体験をしているであろう。そのアニメのフレーズを取り上げて、分析することで友人関係の基本的態度として説明することは、中学校と小学校の学びの違いにすら、隠喩的に言及することになっているのではないだろうか。

5. おわりに

中学生高校生が明日を見通す教育的関わりとして、「教職実践演習」での試みを整理論考してきた。生徒という読者を想定し、生徒が手にして、読みやすい学級新聞を作成するという活動のなかで、学生たちは、自分の life history を振り返り、またそれを文献やインタビューな

どで相対化して語るという作業をおこなったと言えよう。特に、教育実習の体験によって、今の中学生や高校生をリアルにイメージし、また教職課程履修のなかで学修した教育の意義や機能、発達段階に応じた教授法などもこの学級新聞作成には内包されている様相が窺えた。今後の課題としては、学生の学校体験をさらに豊富にすると共に、一方で体験主義に陥らないような知的鍛錬をあわせておこなうことである。